



—特集—

図書館へ行こう



読み聞かせする小原由佳さん(32)と、聞き入る大樹くん(山目小5年)春道くん(3つ)

あなたの身の回りに本はありますか。本を読むメリットは様々。今まで自分にはなかったアイデアを得ることができず。思い浮かべたことをきちんと言葉に表現できるとき、データに基づいた判断ができるようになります。

自宅で、旅先で、通勤通学の合間に。短時間でも長時間でも、興味のある本に向き合うことは忙しい現代において一番の贅沢かもしれません。

あなたが一冊の本を読むのにかかる時間はどのくらいですか。世界中の作家らは、その何倍もの時間をかけて本に知識、体験、思想、人生観など、様々な思いを凝縮します。活字の中にドラマがあるからこそ、人は本に共感するのではないのでしょうか。

あなたは図書館を利用したことがありますか。市内図書館の蔵書総数はおよそ72万冊。あなたの人生を大きく変える運命の一冊が待っているかもしれません。

さあ、図書館へ。あなただけの特等席を準備しました。

あいな人 File_23 いちのせきを愛する人

支援制度を使い、農業を始めた

遠藤比呂志さん

Endo Hiroshi 41 室根町

プラス思考で迷いなし
トマト栽培に将来懸ける



比呂志さんは、一昨年、米とスターチスを栽培していた農家の婿として室根町で生活を始めました。義父と義母は70歳を越えており、広大な農地を管理し、始めて農作業の厳しさに直面。そこで昨年7月にそれまで働いていた製造業の仕事を辞めました。定年退職してから農業に取り組んだのでは間に合わない判断。即決しました。

農協に相談するとトマト栽培を勧められました。品目を選ぶことには「こだわりや迷いはありませんでした」と振り返ります。農業を始めるためのノウハウを学ぶ「新規就農者トータルサポートシステム」を利用。農家で栽培技術を学びました。また、ハウス建設、育苗なども経験。昨年8月から今年3月まで農協の臨時職員として農業体験し、グリーンヘルパーとしても働きました。

現在は、自宅前のハウスと農協の水稲育苗施設を借りて、計20アールの面積でトマト栽培をスタート。新規就農者としては大規模な経営面積です。大変なのは、自宅と農協の水稲育苗施設との往復。作業の効率化を考えれば、いずれ自宅前にハウスを増設したいし、農業で安定した生活をするためには、ある程度の広い面積も必要。「規模の拡大と合わせて雇用も考えなくては」と語ります。規模拡大には投資も伴いますが、「あまり不安は感じていませんね」とキッパリ。

トマトの収穫は6月から10月末まで。トマトは病害虫が大敵。消毒、収穫、成長調整剤の散布など、これからが作業の本番となり、収穫が本格化すれば、朝から晩まで

行わなければなりません。ハウスの中の温度は、40度近くまで上昇しますが、「夕食時のビールは格別においしい」と前向きに捉えています。「農業のイメージが良くなり、若い人がもっと増えればいいですね」と後に期待します。

栽培しているトマトの品種は「桃太郎」。他の品種より甘みが強いのが特徴。初めて収穫するトマトを食べるのが楽しみと笑顔を見せます。高校時代から変わらないというスマートな思考と体型で、農業と人生に向き合います。

Profile

1972年大東町生まれ。地元の高校を卒業後、市内の企業に就職。農業に専念するため、昨年、仕事を辞めてトマト栽培を始める。趣味は、ヘヴィメタル音楽。アメリカのバンド「メタリカ」のファン。愛車のジムニーで参加するオフロード大会も楽しみの一つ。妻と義父、義母の4人家族。

COVER STORY

大正～平成の写真記録集「一関の年輪」完結



Postscript

「一関の年輪Ⅲ」はA4判。207頁。税込2000円。2000部を発行。北上書房で販売している。

一関の年輪刊行委員会(永澤卓三代表)は、一関市の歴史をたどる写真記録集「一関の年輪Ⅲ いちのせき再発見」を出版しました。

大正から平成までを中心に、約650点の写真を、街並み、交通、太平洋戦争、スポーツ、災害、名所、暮らしに分類して掲載。これまでに出版した「一関の年輪」(1980年)、「一関の年輪Ⅱ 20世紀の一関」

(2000年)では取り扱っていない写真に加え、一関の人々の営みを掘り下げようと、写真にまつわるエピソードや1929年の一関市街図なども収録しています。

永澤代表は「やりがいのある役目を締めくくることができて良かった。年配の人たちには懐かしんでもらい、若い人たちには一関の歴史を学ぶ助けになればうれしい」と願っています。